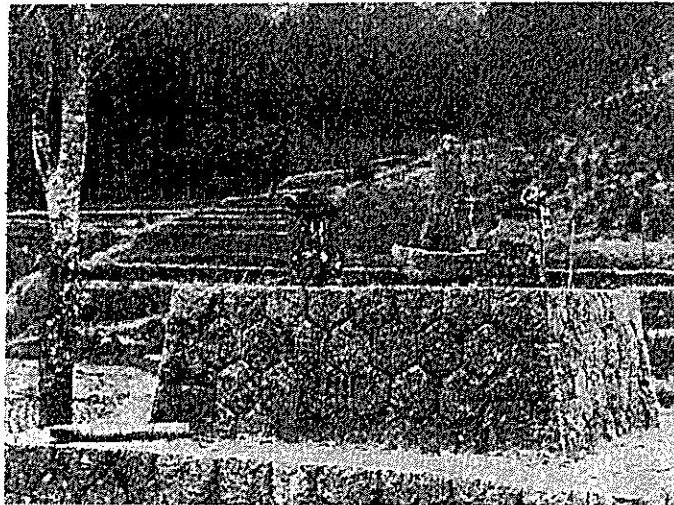


鍋ヶ森神社は、「お鍋」とか「森さま」と呼ぶように、元来、甕穴・森そのものをご神体として祭祀し、雨乞いに靈驗あらたかとして尊崇され、次のような伝説が語りつがれている。

人皇第72代白河天皇の御代、ここ西河内の村長の家に寄寓していた佐藤盛唯なる者、一夜夢に現われた白髪長髯の老翁より神託をうけるに、いわく「われはこの奥の鍋に住む大蛇なるが、不覚にも身を隠すことなく果てしこと、恥とも憾とも言わん方なし、希くばわが亡骸を葬れ、さらば永世に亘り晴雨自在、五穀豊穰疑いなし」と。盛唯夢より覚めてこれを村長に告げ、村人を伴いて行くこと2km余、鍋（甕穴）の傍なる森に件の大蛇の死骸あり、よって是を手厚く葬り小社を建てて祭る、時に永保3癸亥（1083）年なり。雨来およそ900年、乾魃に雨を乞えばたちまち靈雨沛然として山野を潤おし、霖雨に晴天を祈らば則ち雲を払い、草木靈曜を得て蘇生し万民愁眉を開く。靈驗今に変わらず、と。

雨乞いは「鍋ヶ森さんは、踊りがお好きである」から、まず村人が踊りを奉納し、そのあとで神官を中心に雨乞い祈願をしたという。また、森さんやお鍋をけがすと、大雨が降るとか、大水が出るという。

終戦前は、近郷（鳥取・岡山県を含む）はもとより、但馬・東播地方より雨乞いに参詣する人が多かった。これら他村の人は、神官に祈願をしてもらい、お灯明の火を火なわに移して持ち帰り、これを火種として灯明をあげて村人一同が雨乞い祈願をするのが例であった。ある人が、不注意にも火なわの火を消したので、マッチで火



お塚さん（西河内）

をつけて持ち帰った。すると、自宅は不審火で全焼していたという伝説もある。

お塚さん

（上記同人）

西河内地区に入って間もなく、左側に自然石無銘の碑があり、その前面左右に各1基の宝篋印塔がある。これを地元民は「お塚さん」といい、鍋ヶ森神社創建伝説の主人公佐藤盛唯の墳墓であるとか、あるいは平氏の落人も合葬していると伝えられている。今日、鍋ヶ森神社は、氏神峯王神社に合祀しているが、その例祭には神官をはじめ氏子総代その他村役人一同、まずお塚さんに礼拝して後、例祭の神事を行なうきまりである。また、祭礼当日お神輿の渡御がある場合も、お塚さんと旧鍋ヶ森神社に渡御するのである。